

# 農村景観構成要素としての生垣の変遷と保全に関する研究

## -館山市塩見区を対象として-

The Transformation of Hedge as the Components of the Traditional Rural Landscape  
and its Conservation

-A case Study of on Shiomi, Tateyama -

学籍番号 47-166728

氏 名 加瀬 ひかり (Kase,Hikari)

指導教員 岡部 明子 教授

### 0 はじめに

#### 0.1 研究の背景

住宅の囲いとしての生垣は、外敵や自然の驚異から暮らしと家を守り、敷地の境界線を示すものとしてつくられ維持されてきた。農村集落においては、こうして専ら機能的理由でつくられた生垣が連なり、結果的に調和のとれた景観を形成してきた。しかし、近年、生垣景観の劣化が顕著になるにつれて、生垣を地域に特徴的な景観構成要素として意識的に保全していこうとする社会的欲求が高まりつつある。

今後も、美しい農村景観の形成に求められる生垣を保全するためには、まず、どのような経緯で生まれ、人と自然環境の持続的な関わりの中で継承されてきたのか、今なぜ継承が困難になっているのかを知る必要がある。

#### 0.2 既往研究

生垣(屋敷林)の保全についての研究は、限定された一地域においての実態調査(柳井・1994<sup>2)</sup>、近江・1992<sup>3)</sup> 他)や、その変遷を明らかにする事例調査(小森・2013<sup>4)</sup> 他)が中心で、生垣が気候風土によって違ったかたちをとり、機能を変化させつつも

維持されてきたのか、その変遷を解明しきれていない。

#### 0.3 研究の目的

そこで、本研究では、生垣が特徴的な農村景観の今後の保全に資する知見を得るために、生垣の連なりが景観を形成している農村集落の多い安房地域を対象とし、集落毎に異なる景観構成要素としての生垣の立地特性を解明する。さらに、生垣景観を劣化させている事情を明らかにするために、ヒアリング調査を行なった。対象としたのは、暮らしが大きく変わった今日も生垣が特徴的な農村景観が認められる館山市見地区である。

本研究ではまず、1)住宅の囲いとしての生垣の発祥と変遷を歴史的に整理し、2)生垣景観の特徴を気候風土や地形立地等の集落的要因から明らかにする。その上で館山市塩見区を対象として、3)集落空間の変容や4)暮らしの変化の中で、人がどのように生垣景観を継承してきたかを明らかにする。そして生垣の現状と人の生活との関わりから、生垣景観継承のための課題を整理した。

なお本論では、生垣の定義は、額田(1984)<sup>1)</sup>と同様に「生きている木を用いた垣

根」とし、形状や刈り込みの有無は問わないものとした。またこの生垣は特別な記載のない限り、厚みを持った樹林形状のもの(屋敷林)も含む広義の意味で用いる。

## 1 農村集落における生垣の歴史的変遷

外敵や自然の脅威から住宅を守る障壁物として、また土地利用の区分を示す境界領域として生まれた生垣は、その時代の暮らしと生業の必要に応じて機能や形態を変化させ、時代ごとに特色のある垣根文化を発展させていった。(図1)

人は、安心して快適に暮らせる空間を獲得しようとして、土地や自然に改変を加えるが、その結果として生み出される景観要素は造形的に調和し、美しい農村景観として現れる。生垣は、人と自然環境との関わりの表象にほかならず、その時代の必要に応じてかたちを変えながらも世代を超えて続いた「生きられた景観<sup>5)</sup>」を構成するものであることがわかった。

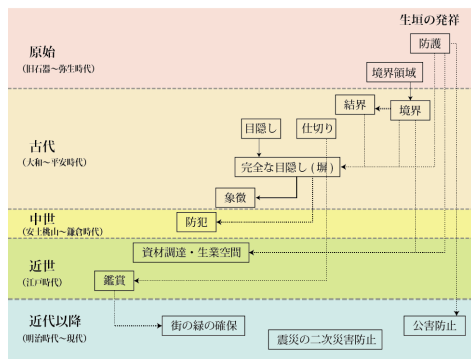


図1 生垣の機能の発展

## 2 千葉県安房地域における生垣の立地特性

### 2.1 集落の選定

生垣景観を育み、今日まで残してきた集落の特徴を明らかにするため、マキの生垣の連なりが特徴的な農村景観を形成している、千葉県安房地域の古代以前に成立した「自然発生的集落」を対象とし、生垣景観

の分布とその年代の変遷から、生垣の立地特性を分析した。

安房地域は718年に成立した旧安房国の範囲と定義し、対象とする集落空間の選定には、平安時代の行政区画である郷の名称を辞典『和名類聚抄』<sup>7)</sup>で抽出し、その地名を『角川日本 地名大辞典』<sup>8)</sup>から現在の場所を特定する方法をとった。これにより抽出された38の地域について、集落の地形立地、集落形状、集落内微高地等の集落の特徴と、生垣の関係について分析を行った。

### 2.2 安房地域の自然発生的集落の立地

安房地域の集落は、山地や丘陵地の山裾、海岸砂丘や扇状地などの低地微高地、または山間谷間に多く立地していた。こうした地域は水利が良く、地盤がしっかりしており、自然発生的集落は、人間の生息地に最適な条件を備えた地域が選ばれてきたことがわかる。

### 2.3 生垣の立地特性

生垣の分布を決定づける集落の地理的・社会的特徴についての考察より、以下のような生垣の立地特性が明らかになった。

a) 集落立地…山間谷間上流に位置する集落(鴨川市二子, 館山市大井 etc.)では生垣は見られず、山地中腹～低地では広く分布している。

b) 集落形状…生垣の分布は集落形状によらず広く見られるが、列状に展開する高密度な集落(鴨川市前原 etc.)では生垣は見られない。

c) 生垣の形状…集落の微地形と風環境が住宅周りの生垣の出現位置と形状に影響する。

d) 生業…比較的敷地面積が小さくかつ高密度に展開する漁村集落(鋸南町吉浜, 勝浦市興津 etc.)では生垣の分布は見られない。

以上のように、生垣の分布と形状は集落の微地形とそれによる自然環境に決定づけられ、集落ごとに個性ある景観を形成している。

### 3 千葉県館山市塩見区における生垣の変遷

#### 3.1 館山市塩見区の概要

館山市塩見地区は、北方に館山湾を望む緩傾斜の山間谷間に形成された集落で、その集落立地は山地中腹の斜面地から海岸段丘までと、安房地域の自然発生的集落の中でも特に集落空間の多様性と生垣分布・形態が特徴的な集落である。

近年人口減少、高齢化が著しく、現在塩見地区の高齢化率は 56.7%に達している。一方、二地域居住や別荘地としても注目されており、居住者の内訳は新規移住者や二拠点居住者が4割弱となっている。冬期には「大西」と呼ばれる強い西風が吹くため、防災のためのマキの生垣が集落の伝統的景観を形成してきた。

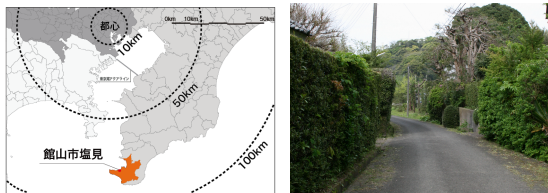


図2 館山市塩見区の位置と集落景観

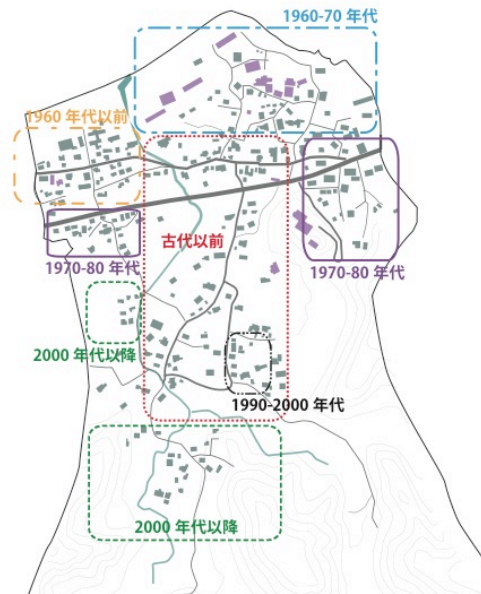


図3 塩見集落における住宅地の展開

#### 3.2 集落空間の変化と住宅の囲いの変遷

文献調査やヒアリング調査から集落空間の変容を把握したのち、画質が比較的鮮明で、住宅の囲いの識別が可能な1961年、1975年、2016年の航空写真と住宅地図から、住宅の囲いの変遷を調査した。(図4)

1960年代以前は立地に関わらず、ほぼ全ての民家が生垣に囲まれており、1970年代頃までは生垣の残存率が高かった。

塩見区で集落空間が大きく変容した1970年代以降、海岸側の開発や、集落内に徐々に空き家が増えたことで生垣の消失が進んだ。

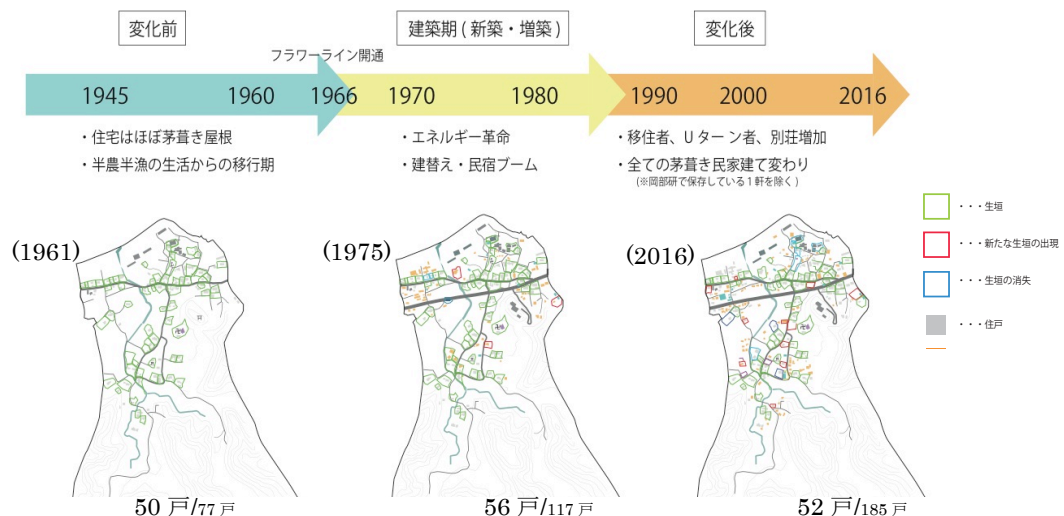


図4 集落空間の変化と生垣を持つ民家の

一方、新築住宅建設は1960年代以降急増したが、新たに建築された民家のほとんどは生垣を持たず、1960年代には9割近かった生垣のある民家の割合は、2016年には約3割にまで減少した。1970-80年代は塩見集落内で茅葺き民家からの移行や生業の形態にも大きな変化があった時期である。昔からの生垣が比較的に残存している一方で、こうした暮らしの変化が農村景観の存続に大きな影響を与えたことがわかった。

#### 4 暮らしの変化と生垣との関わり

集落空間と生垣の変容を踏まえ、集落に暮らす人々が具体的に暮らしの中でどのように生垣と関わってきたのかを明らかにするため、ヒアリング調査を行った。

##### 4.1. 生垣の機能の代替と喪失

集落内に茅葺き屋根の民家が多かった頃、生垣は防風・防火のために欠かせないものであり、今も防風の為に維持されている。しかし現在はこうした機能の必要は弱まっており、生垣のバッファ領域としての機能や垣根自体が持っていた境界としての機能なども、住宅の増築や土地の売買の過程で失われた。これらの機能の消失は、いずれも1960~80年の間に起こったことがわかった。その頃から急激に生垣の設置が減ったのには、こうした機能の消失が要因として考えられる。

##### 4.2 生垣が維持されている理由

生垣は管理が大変で、それは高齢化していく集落で深刻な問題になりつつある。一方で塩見区では「先祖が残したものだから」「近所にみつともないから」といった理由で、生垣は放置されることなく丁寧に手入れされている。

#### 結論

安房地域においては、人びとがこの地に住み始めて以来、生垣は機能を変化させな

がら当たり前に存在してきた。人がそれぞれその土地の自然条件を微細に感じ取り、生垣で家を囲った帰結として、調和のとれた美しいと感じさせる生垣景観、すなわち「生きられた景観」を生んだことがわかった。こうして、世代を超えて続いてきた囲いとしての生垣の連なりが成す農村景観は、その土地の気候風土や集落の成り立ちを知る手がかりを与えるものであり、それを守ろうとする意識につながっている。

また、塩見地区における調査から、1970年代以降が、集落空間にとっても、生垣にとっても大きな転換期だったことがわかった。人と自然との関わりの微細な違いを反映した生垣の個性のみならず、生垣の持つ機能が急速に失われ、その存続が危ぶまれた。しかし、なおも生垣が特徴的な景観を辛うじて維持できているのは、継承すること自体の意味、機能的価値に代わって景観構成要素としての生垣の価値が認識されるようになったことによる。今後、調和の取れた生垣景観を保全していくためには、時代とともに移り変わってきた生垣の価値を共通認識とし、意識的に景観構成要素として生垣を保全しようとする欲求を支援するしくみが求められるのではないかな。

#### 参考文献

- 1) 額田巖(1984):『垣根-ものと人間の文化史』,財団法人法政大学出版局
- 2) 柳井重人 他(1994):千葉市における生垣の分布特性に関する研究
- 3) 近江慶光 他(1992):茨城県取手市における生垣等の囲障形態に関する研究
- 4) 小森美咲 他(2013):屋敷林の変容と民家の空間構成に関する研究
- 5) 樋口忠彦(1993):『日本の景観 ふるさとの原型』,筑摩書房  
樋口は、自然に対して受け身で依存的に、自然をうまく利用した環境の改変を行ってきた結果形成された「生きられる景観」こそが「美しい景観」であると述べた。
- 6) 大山勲(2001):伝統的農村集落における道空間の形態とその形成要因に関する研究 -甲府盆地の平坦地に立地する集居農村集落を対象として-  
自然発生的集落とは、「無名の民衆の生活が長い時間をかけてつくりあげてきた集落」のこと。
- 7) 『和名類聚抄』(930年頃)
- 8) 『角川日本地名大辞典 12』, 角川書店(1984)